

論文出版は遂に査読者も偽装する時代に

By Holly Else, *Nature*, News, Vol. 599, p.361, November 18, 2021.

特集号で出版された論文が相次ぎ撤回に

大手電子出版社であるエルセビアは 165 本の in press 状態の論文と既に出版された 300 本以上の論文を撤回する予定である。これらの論文は 6 個の特集号で出版されたものである。また、シュプリンガー・ネイチャーも同様に特集号で出版された 62 本の論文について撤回しているとしている。同社の広報担当によると、「信頼を基盤とする査読プロセスを壊し、出版経歴に小細工を加える行為であることを調査結果が明らかにした」と答えている。

存在しない特集号の査読者

撤回されたこれらの論文は特集号の論文として出版されたという共通点がある。特集号では、「メタヒューリスティクスの現在地と将来」のようなテーマを掲げ、それに関連する論文を募る。募集テーマを絞った特集号では、査読者もその分野の専門家が必要となり、ゲストエディターとして普段は各々の雑誌の編集に関わっていない人物が査読を行うこととなる。「学術詐欺師」達はここに注目した。

大手電子出版社である Hindawi の調査によると、査読レポートの多くが信頼度の低いメールアドレスから来ていた。メールアドレスの末尾が .uni ではなく .univ になっていたり、.ac.jp ではなく -ac.jp になっていた。彼らは一見著名そうな有名組織の人物であるかのように振る舞い、特集号の企画をジャーナルに打診するようだ。シュプリンガー・ネイチャーの *Nanoparticle Research* では、投稿された論文の多くが低質でテーマに合致していないことに編集委員会が気づき、早期に対応が取れたようである。要は特集号とそのゲストエディターをでっち上げ、簡単に論文を出版するスキームのようだ。

クソ論文を CV に残したいのか？

こうした論文が蔓延する根本的な理由は論文の数を重視する現在の官僚的な人事評価プロセスにある。フランスにある Toulouse 大学のコンピューターサイエンティストである Guillaume Cabanac は、「たとえ論文がゴミでもそれを出版する能力は CV の見栄えを向上させて学界に残るためのグリーンカードとなる。」と述べている。論文監視の最大手サイトである *Retraction Watch* の管理人である Ivan Oransky は「そんなクソ論文をなぜ CV に載せたいのか？」と疑問を呈している。こうした論文の多くが中国の研究機関から投稿されており、特有の翻訳ソフトによる意味不明な文章が目立つものである。

前回の投稿でも記載したように、中国の論文出版競争は異常なまでに加熱している。同様に論文出版競争が激化しており、論文撤回大国としても知られている日本もご多分に漏れずである。国内でもお友達査読に近いバイパス行為は時より見られるものである。国内の学術出版社も効果のない出版倫理の講演会や e-ラーニングは程々にして、学術誌による撤回履歴がある人物や Beall's List にある雑誌に投稿している人物を採用しないなどの人事評価の見直しにいい加減取り組む必要があるようだ。